

農における放射線影響グループの活動に参加して

私はいままで被災地へ行ったことがなく、メディアの発信する情報によってしかその状況を把握していませんでした。たった1泊2日の活動期間で、どのくらい現状把握できたのかわかりませんが、ふくしま再生の会の方々と一緒に行った放射線や現地に詳しい大学の先生、先輩からお聞きした話でとくに問題だと思われたことや考えたことをいくつかあげてみようと思います。

①国の官僚が現地に来て現状を把握しようとしな

スウェーデンの調査団やニューヨークタイムズの記者は来たことがあるようなのですが、国の官僚がふくしま再生の会まで顔を見せたことはないそうです。再生の会の方々はまずは現場に来て、現状を把握してほしいことを訴えていました。被災地の問題解決に本気で取り組むためには、国の役人が現地に来て再生の会の方々と避難した方々の生の声を聴いてともに歩いていく姿勢が必須だと思いました。

②除染作業は一筋縄ではいかない。とくに森林の除染は困難

放射性セシウムは表層部の粘土質に吸着するので、その多くは表層部分の土を取り除くことで除染をすることができるそうです。しかし汚染された土の処理の問題が残ります。どこか一か所に集めて遮蔽する方法のほかに除染した場所で数十センチの穴を掘りそこに埋めてしまうという方法があるそうです。埋めてしまうと地下から放射性物質が拡散していつてしまうのではないかと思うかもしれませんが、セシウムは粘土部分に強く吸着しているので大丈夫だそうです。そのことを一般の方が納得できる形で証明をしていく必要があると溝口教授はおっしゃっていました。

イノシシが圃場に穴を掘ってしまっていてどこが表層部か決められないこともあることがわかりました。放射線に対して減衰効果のある水をはって代掻きを行い、小さな粒子である粘土を表層部に持ってきてセシウムを吸着させ、それをはぎ取るという方法を検討中だそうです。水を張ることは圃場の維持、管理にもつながるということで有効な方法だと思いました。

山の土や水分の流出とそれに伴う放射性物質の移動を調べるための装置を見せてもらうために明神岳に登りました。その際森林は圃場と違い斜面に勾配があるし、木々が茂っているので機械で表層の土を剥ぐようなことはまず無理だと思いました。

③報道について

地元の新聞や NEWYORK TIMES、BBC、スウェーデン視察団は再生の会まで足を運んできたのに日本の大手報道機関の記者は現地に来ない（来られない）という現実があるようです。これは危険な所へ行かせることに対する労働組合の反対があるかららしいのですが、メディアの役割ってなんなのだろうと考えさせられました。

④一様に分布しているわけではない放射性物質

道路の際と道路上では線量計の値が大きく異なりました。数センチ線量計をずらすだけで値が5倍程度になりました。これは、道路上にあった放射性物質が雨によって流れて道路際の土壌にたまっているからだそうです。このように決して連続的でない汚染状況があるのに1㎡当たりの放射性物質について議論することがはたしてどの程度意味のあることなのか溝口教授はおっしゃっており、私もそのことには疑問をもちました。

このほかにお聞きしたこととしては断片的ですが以下のことがありました。

自主避難しているひとには補助金が出ない。

住民の避難先を把握することに自腹を切って努める3人のボランティアがいること。

一度住民たちを落ち着かせるために派遣された健康アドバイザーによって本当は安全ではないのに避難しなくてもよいと言われたということ。その後計画避難区域に指定され、住民の方々は信頼を裏切られたということ。

また、コメの作付禁止区域で除草など維持管理が徹底されていたのには感動しました。

まとめ

被災地のためにいままで私が行ったことといえばささやかな募金程度でした。二日間の活動に参加したことで私ができることが一つ増えました。それは、私が二日間で見たと、聴いたことを友人や家族といった身近な人に伝えていくことです。微々たることですが、再生の会の方々も口コミでいいから現状を伝えてほしいとおっしゃっていたので、このレポートを皮切りに、機会あるごとに発信していこうと思います。